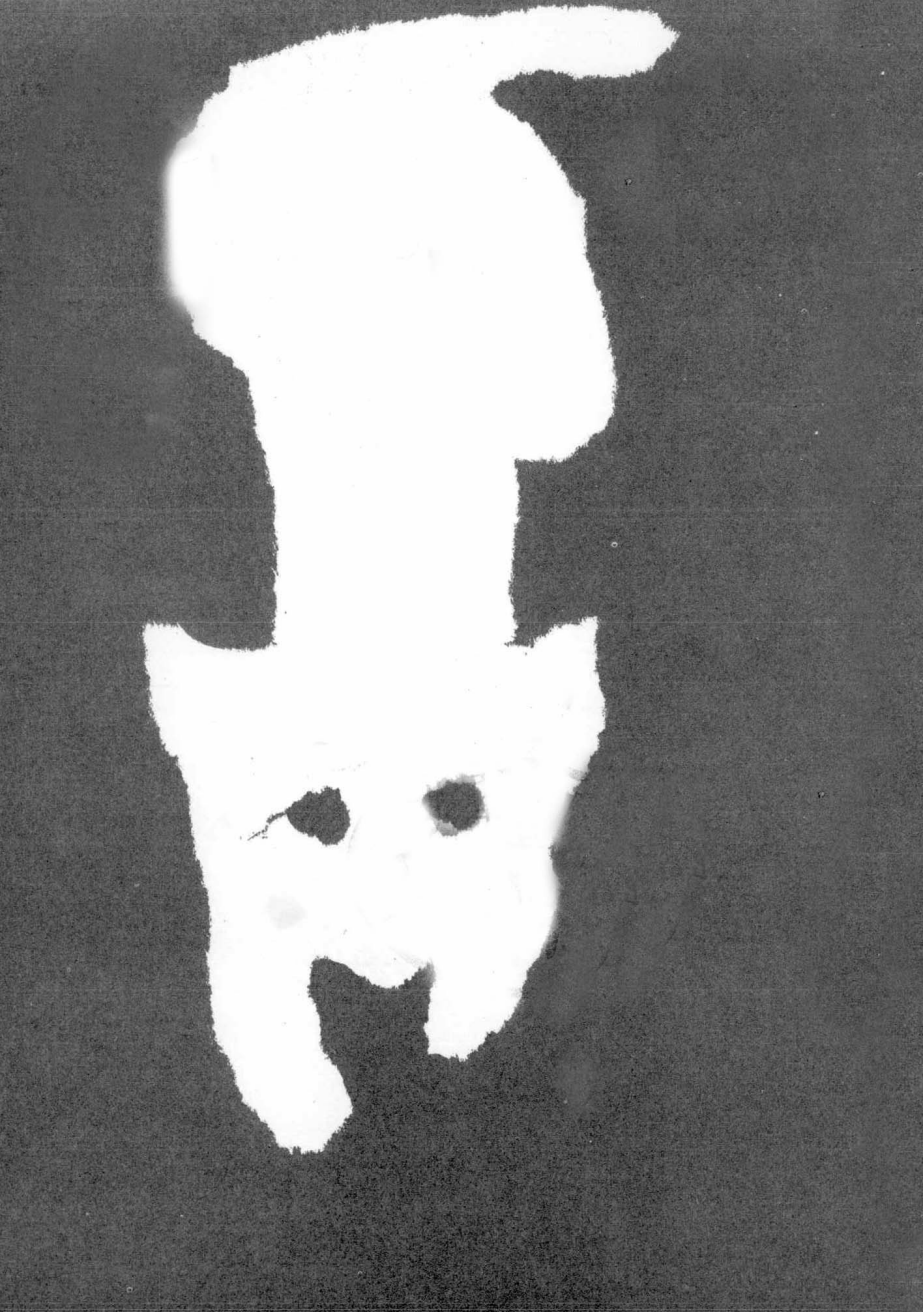


犬と猫のはなし　田中澄江　講談社

犬と猫のはなし

昭和四十五年五月二十四日第一刷発行

著者＝田中澄江

発行者＝野間省一

発行所＝株式会社講談社

東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二

電話＝東京（九四二）一一一一（大代表）

振替＝東京三九三〇

印刷所＝豊国印刷株式会社

製本所＝黒柳製本株式会社

定価五九〇円　落丁本、乱丁本はおとりかえします。

© 田中澄江　昭和四十五年　Printed in Japan

0093-123958-2253 (0)

目次

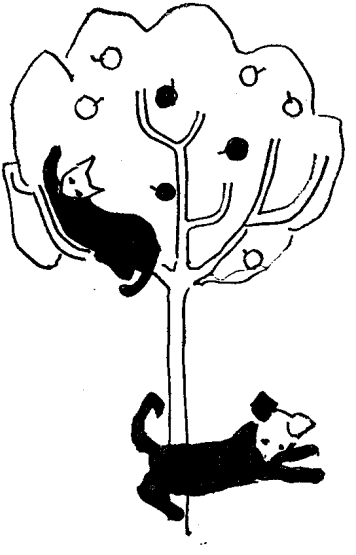
犬と猫のはなし　7
死んだろく　35
黒いおんな猫　55
白い少女　73
太郎　93
猫の好きな妻　171
猫たちの舞踏会　183
あとがき　296

装幀　三田恭子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

犬と猫のはなし

犬と猫のはなし



その犬が鵠沼の、桃畑にかこまれた家の庭先に、ある朝忽然と（そのように、私には思えた）あらわれた時、私はすぐに思った。〃この犬は私のところにやって来たのだ。〃

白地に黒のぶちのある、脚の長いその小犬は、ひきしまった胴と、きゃしゃな尻尾をふりながら、柴垣の根元からにこにことわらって顔を出し、

〃奥さま、奥さま、おなつかしゅうございます。〃

少しはじらい、砂地をまっすぐに縁側の私のところまで来て、

〃おめにかかれてうれしくてうれしくてどうにもしようがございません。〃

前脚で、しきりに私の足にさわろうとし、顔をすりよせて親愛の情をのべるのであった。女犬だということは、見たときに感じた。からだつきがたおやかで、眼許がなんともなまめかしいのに、ひとにこびる男犬の、あぶらっぽいいやらしさがない。

その白い毛並みは純白の、雪のようにかがやいていた。

私は起きぬけの寝衣のまま縁の硝子戸をあけ、桃畑の向うにつづく片瀬山に、晴れた日は朝毎にたなびく横雲を一とき、ぼんやりとうち眺めていた。今日もまた一日がやってくるのか。妊娠五ヵ月。千吉に嫁いで三年目の春であった。

臍のあたりにときどきピクピクと動いて、固くふれあうものがあった。そのもののことを朝おきて一日中、夜ねてまで、私は考えていた。なかなかねつかれなかった。ねるとよく夢を見た。ちなまぐさい夢が多かった。

——海の波の、まっさおにくずれるその青さの中に私はたって、さっと高くもり上った波に白く光った魚を見る。波のしぶきが、私におそいかぶさるその一しゅんの時、私は魚をとらえるのだが、べっとりとてのひらに銀のうろこがついて、魚は真赤な血のいろ。骨の形丈白くはっきりとして。波はいつか絵にかかれた海のように、音も動きもなくしずまっている。

——陽の光りがななめに透ってまっさおな水。中に白く、キラキラ光る一線がある。手をふれる。指が五本、ざっくりとその向うに切れて落ちる。血が一筋、のりのようにゆらめく。痛くない。その一線は鋭い刃物の刃なのだが。

——あるとき、白一色の夢。白が動く。手術衣を着た医者が私の指を一本ずつ、はさみで切りおとす。ぱちんぱちんと音がして、その手応えはたしかに指にある。のうばんの中の血。そこにおちた指がやっぱり白いのだ。

拝啓　このところ、つづけて血液と、銀いろと、木に関係のある夢を見る妊婦でございます。生れる子供が何か殺人行為を犯す様になるのか、あるいは、出産までに、胎内で手術され、形なく切断されるようになるのか、あるいは私が出産と同時に死ぬのか、不安でなりませぬ。胎動を感じ出して半月になります。半年前より鵠沼海岸に居住。三日に一度位、海を見に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

出かけますが、つい先ごろまで、途中の砂山に畑に、一面の桃の花がうす紅に咲いて、その中をわけてあるいてまいりました。何か色彩の記憶と、出産の恐怖が、まじりあっているようにも思われますが、殺人者の母（あるいは又難産の産婦）に共通した夢でもあるのでしょうか。お手数おそれながら、おうかがいできましたら幸甚でございます。

新聞の婦人欄に、はじめて投書しようと思って書いた手紙も、出すことははばかられた。そのどれ一つがたしかめられても、怖いことであった。

私は夫にも夢の話しができないでいた。一日一日と出産に近づく事は、焚火の刑にあおうとして、足許に山と積まれた焚きものに火がつけられ、その下にチョロチョロと焔が走りはじめたのを自分の眼で追っている思いに似ていた。逃げたい。逃げられるものなら。

逃げたい。逃げたい。逃げたい。じっとしていると、おうおうと泣き叫びたい気が、あとからあとからこみあげて来た。

娘の時私は、荒磯の波のくだけるところに身を投げこんで、湧きたつ渦と泥の中を泳ぐのが好きであった。馬に乗って、野を真一文字に走らせることもできた。私は山に登り、霧の夜をさまよい、光りのない地面を四つん這いになって這いまわって来た。華厳の滝の滝壺で泳いだという青年の話しは、もっとも私を嫉ませたものであった。誰もひとの見ていないところで、あぶないことをするのを私は好んだ。ひと前に、自分がむきになった顔をさらす恥じにはたえられない。あの乱暴で、あの誇りにみちた自分はどこへいったか。いわたおびをしめるなどと、白い腹をむ

き出しにして、ひとになでまわされて結構でございますなどと言われ、私は又、ありがとうございますと、お辞儀などをして。

自分は、他の誰一人から結構でございますなどと言われなくても、結構でなければならぬのだ。妊娠して私は、全くうらぶれた思いであった。妊娠して私は、自分のからだが、自分の自由のらち外にあることを改めて知った。その事はすでに、千吉と結婚の式をあげて、衆目の前に、一人の男、一人の女として並んだ時、覚悟しなければならなかったのであった。自分が自分の自由にならぬ。その口惜しさは女のからだとなった時、骨身にしみていたはずであったというのに。

腹は見るのも恐しいように、一日一日と前につき出され、朝毎の目覚めに自分のからだは、いきなりは跳び上って起きられない。私はこんな自分を見るにたえなかった。これもうかうかとおのが自由を失うものと知って、結婚の場などにのぞみ、おのれ自身を裏切った報いなのであろうか。

——僕はあなたの書かれた詩を愛します。それはあなたの心を肉体を愛するのと、なんのかわりがありましょう。

こういう書き出しにはじまる求婚の手紙が、その同人雑誌に私の幼い詩をのせたいとやって来て二度目の千吉から来た時、私はすぐに茶の間へいって、母や弟、その時三度目の妊娠の診断を受けにいった帰り、実家によった姉の三人の前にさし出した。

〝ラヴレターじゃないか。ばかだなあお姉さんは。だから文学青年なんかとつきあうなって言っ

ているのに。〃

四つ年下の弟は言った。私は専ら、弟の友人の大学の経済の学生達とばかり遊んで、海山へ行を共にしていた。

〃まあ、きぬ子さんは文学青年なんかを知ってるの？　およしなさいよ。そのひと髪の毛が長いんじゃない？〃

大学の経済を出た夫に添って、つつましく生きている姉は言って、女に手紙をよこす丈でもそのひとは不良なのだろうとつけ加えた。

母一人、まじめな顔つきで読んで、

〃とにかく、どういうお家の方か、早速興信所で調べてみましょう。その結果がわかるまで、いらしてもなるべくおあいしないようにおしなさい。女中達にも言っておきます。きぬ子さん。これにこりて、めったに氏も素姓もわからぬ方を、自分の室（しつ）になど通してはいけませんよ。あなたがわるいのよ。〃

私は身を固くして、親きょうだいに見せた事を、その場で悔いた。

――私の肉体が愛されるというそのことについてはみんな承知している。

満二十四歳のその日まで私は、私の女の肉体が、男に愛されたいと待っている事を、一度も意識の上で知らなかった。そう言う文句を私にじかに言い出したのは、千吉が始めてであった。

私は小さい時から、姉にくらべて色が黒く、口が大きく鼻が低くて母はどうせお嫁にもらい手

もないだろうから、出来る丈、勉強を身につけてやるのだと、真顔でお客さんに言い言いした。
しかし私は自分の顔を愛した。私は鏡の前で一人見つめ、一人ほおえんで見飽きなかった。私は又、自分の肉体を愛した。
殊にそれは女になってからの日々の勉強している夜更け。あきると私は胸元をあけ、袖をひきあげ、キラキラ光る自分のからだをああ美しいと眺めまわした。私は他人が指一本、これにさわる事を許すまいと思っていた。まして男が。

男は女を不幸にするもの。母はそのように娘に教えた。三十一歳で、十二歳を頭に、四人の子供と、多額の負債を残された未亡人の母は、私に家事雑用の殆んどをやらせず、そのひまがあれば本を読めと、きびしい顔つきで机の前に追いたてるのであった。
〃勉強して、男に負けない女にならなくてはいけません。〃
母は男を憎んでいた。母のたった一人の男であった父は、白い綿帽子をかぶって、何も知らずに母が嫁いで来た時、すでに一人の女中に手をつけていて、母を迎えながら愛妾の地位に引きあげた。父は愛妾を離れに住まわせ、愛妾は産じょくにいる母の隣室で、父と一つ床に一緒にねた。古くから家に出入りの番頭は子供達に、母は苦労したひと故、親孝行しなければならぬと語る時、必らずそれを言うのであった。
〃お母さん、そんな家、出ればよかったのに。〃
〃よっぽど死のうかと、何度思ったか知れませんよ。〃

〝そんなお父さん、けんかすればよかったわ。〟
〝だって女ですもの。女は男のわがままを我まんしなければ、立派なひとと言われなかったんですもの。〟
私は母を尊敬していた。母と子は何べんそういう会話をしたかわからない。家屋敷を他人に貸して、家作の中の小さい家に入り、十年たって負債を果してもとの家に住み移り、私達きょうだいに高等教育を受けさせてくれたのは、母がしっかりしていたからである。私の日記には、母をたたえる言葉が屢々、女王を仰ぐ忠実な家来の讃めうたの様にしるされ、ある年の亡父の法事のあった一日に、こんな言葉ものこしている程であった。
〝お父さん、もしも霊魂がここにあるなら、聞いて下さい。お母さんをいじめたお父さん。私はあなたの子に生れてかなしいと思います。どしてもあなたの冥福をいのれないのです。許して下さい。〟
父の子と生れたのがかなしい許りではない。あれ程母が、それ故なげきにたえたという女の性を、自分もまたしょって生れて来た事がそもそも私にはかなしいのであった。
ある日そのことが、やっぱり自分にもやって来た時、私ははばかりにしゃがんでしゃくりあげて泣いた。
自分の意志にかかわりなく、自分の眼に見えないところで、男との出あいにそなえた組織が、大きくひろがってゆく。その口惜しさをなんとあきらめよう。私は女でないものでありたい。
なのに私は、私を女として愛したいという千吉の家から、礼服に身を正した仲人が来て、白木

の台に数々の祝いものを打ち添え、結納をさし出した時、その受けとった挨拶をまっ白にのべた鳥の子紙に書こうとして、うれしさに震え、筆先の乱れをなかなか調えもできず〝千吉さん、およめにもらって下さってありがとうございます。〟声に出してそこにいない千吉に、言いもかねないのであった。

たまたま千吉に、もっとも気永に根強く求婚されて思いたった結婚ではない。男の大学に入って勉強をつづける気なら洋行もさせよう。将来女学者で独身を通す気なら財産もそれ相当にわけてあげよう。母がせっかくすすめるものを、やっぱりお嫁にいきたいと、学校を出るやそうそう言い出し、それなら、女は男の十倍早く年をとる。一年でも若いうちにとせきたてる母につれられ、今まで塗った事もない紅白粉を顔に塗りたて、振袖、丸帯の見合写真を写しにでかけて、あの家この家、伝手を求めて配ってもらった。そればかりではなかった。幾つかの夜々は、床の上にすわって、

〝神さま、どうぞいい夫をお与え下さいませ。〟

一心に手を合せて祈ってもいた。

千吉との縁談が軌道にのったのは、何度目かの興信所の調べで、その家に、私の家に数倍する資産があり、旧藩代々の家系も正しく、医者の父が官立大学の出身の、篤実な人物とわかったからである。しかし母は金にならない同人雑誌の原稿など書いている丈、これと言って定職もなく、大学を出て五年もして、親の仕送りで暮しているような独立心のない人には、いくら資産が

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com